

千里山のお嬢様都へ行く

十五回生 伊藤 發子

私は昭和25年大阪府立桜塚高校（旧豊中高女）を卒業し、東京の大学（お茶の水女子大文科）に入學しました。高校の親しい友人たちは阪大にしました（彼女たちは豊中のお嬢様たちで、今でも親しくつき合っています）。でも私はどうしても花のお江戸へ行きたくかった。あの当時は終戦直後、日本はアメリカの占領下で食糧難、戦前の大学の寮も立派なのが空襲で焼け、戦時中の軍需工場の寮を使っておりました。広さは一人二畳割当、六畳に三人八畳に四人という具合。でも三食食べさせて貰い、隔日にお風呂もありました。沖繩から来ている人達は留学生と言われておりました。銀座は焼野原、でも浅草は今のままでした。

上京するには東海道線に乗るのですが、昼間は進駐軍が使い、日本人は夜行の4本（8時、9時、10時、10時半発）のみ乗れるのでした。そのため当日は朝8時頃から並びました。しかし日本人は割り込む人や騒ぐ人はいませんでした。さすが大阪は商都ですから、貸し椅子屋があり、お風呂屋で使っていた小さい腰掛けを、今で言う1000円くらいで貸しました。それ

に十二時間以上坐って、改札が始まると、駅員が誘導して、早く来た人から坐れる手配をしてくれました。東京駅は何もしてくれませんでした。それでも超満員であることには変わりなく、通路やトイレまで満員でした。東京まで夜中に十二・三時間かけて行き、朝、車窓から富士山を見た感激は忘れられません。

寮は全国から学生が来ていて、いろいろ故郷の話をし、徹夜でしゃべったりしました。寮の規則はゆるやかで寮監は数人いましたが、私たちが夜遅く帰寮しようとして夜中電気をつけていようと何も言いません。きつと学生達を信用していたのでしよう。そこで私が思ったことは千里山以外の土地では地元や身内のしがらみが多く大変そう、千里山は知的で自由な所だと気が付いたことでした。

でもいろいろ考えさせられました。ある夜、「もし道で親しい友人に逢ったらなんと言うか」と言い合ったとき、秋田の人が「アイーヤツ」と大声でかけよって、友人の肩を叩くというのでした。東北の人は無口で派手なことをしないとないと思ひ込んでいたのでびっくりでした。また足柄上郡という金太郎さん（坂田金時）の出身地の家に招かれました。遠目にはうっそうとした山の中ですが行ってみると小じんまりとした村で、

郵便局にお勤めのお父様が歎待して下さいました。私は熊が出てくるか、心配していたのですが、夏は涼しく快適そうなお住いでした。こんな山の中から娘を東京に出して勉強させる御両親には感心しました。何でも先入観で物を見てはいけなないと考えさせられました。

しかし大学に行くところはいかない。同級生にはチャキチャキの江戸っ子という人が何人かいて、地方出のやばな私は肩身が狭かったのです。お茶の水は現在も極端に学生数が少く、一学年で国文科20名、英文科15名、数学科13名その他という構成でした。その中で私が注目したのは安田美佐子さん。彼女は安田財閥の本家の令嬢で、東大の安田講堂を作り寄附した安田善次郎の孫に当たります。彼女は素晴らしい美人で頭が良く群書類など古典の本を持ち歩いていました。また、当時パキスタン大使だった父上についてよく外国へ遊びに行っている山形さん。カネボウ社長の令嬢壇野さんなど。だが彼女たちは全く威張ったり、人を差別することなくスマートで上品でした。その上言葉まで美しい。サヨナラ、バイバイというところを「ごきげんよう」と、小首を傾けてにっこり笑うところなど、とても真似できない程素晴らしい仕草でした。又彼女たちはテニスが趣味で、よく運動場のテニスコートで

打合っておりました。当時テニスの上流階級のステータスだったらしく、現天皇陛下と皇后陛下のテニスは有名です。

千里山にも戦前テニスコートがあった

大先輩の八回生富田利和さんが4月19日開催の「ちさと会」

の乾杯の挨拶の中でお話になりました。戦中戦後の食糧難時代に畑になってしまいましたが、お稲荷さんの下に立派なテニスコートがあり、往時はよく整備され、誰でもプレーできたそうです。実際にプレーされた富田さんは現在も大阪府テニス協会相談役、豊中市テニス協会の会長など務めておられます。

千里山では個人のお宅の庭にもテニスコートがありました。有名なプレーヤーも何人もおられました。編集部注

彼女たちにはとても勝てないと思っていた矢先、授業で音韻学を学び、日本語のアクセントを知り溜飲を下げました。日本語のアクセントは大別すると二種類あり、第一種が関西アクセント、第二種が関東アクセントなのです。つまり日本語のアクセントの正統派は関西アクセントなのです。日本の長い歴史の中で、明治以前は京都を中心とするアクセントがオーソドックスであったのです。明治維新後首都が東京になったので、アクセントが関東が主流になってしまったのです。明治政府は明治維新後、明治5年になってようやく行政上の改革を実行しました。①太陽暦②徴兵制③義務

教育(小学校)④鉄道(最初は横浜新橋間)。内閣を現在の形にしたのは明治18年です。これらの改革の目指すところは日本の近代化、富国強兵を実現することです。

そこで一番ネックになっていたのが各地方で日本語が分化していることでした。江戸幕府は故意に各地方の言葉の違いを統一しようとしませんでした。言語によって身元がはっきりする方がよいと考えたのでしよう。しかし近代の軍隊では東北の人と鹿児島の人が意思が通じないのは困るわけです。そこで明治政府は初等教育、標準語の普及に最も力を入れました。明治22(1889)年の日清戦争に日本は勝利し、清国(現在の中国)から賠償金を手に入れたのですが、明治天皇の命令で全国にまだ普及していない小学校の建設と教員の養成にその費用を使いました。これについて中国のジャーナリストの一人は「これから日本は発展するぞ。もし清国が勝っていたらその金は皇帝が立派な宮殿や庭園を作って自分の威力を示すために使うだろう」と書きました。小学校の義務教育で最も力を入れていたのは標準語の普及でした。最近テレビで地方へ取材に行つて、その地のお年寄りにインタビュウするのがありますが、彼らが鮮やかな標準語でしゃべるのでびっくりです。明治5年に政府が目指した日本語の標準語の普

及は150年掛かって実現したわけです。

アクセントの話題に戻しますと、関西アクセントは日本人の体質に一番合っているのだそう、一度関西アクセントが身につけば、どんなに努力しても関東アクセントにはなり難いそうです。

もともと関東アクセント、東京弁は地方の方言です。だから関西人から見ればおかしいことが一杯あります。まず短く言う。台所はダイドコ、塩鮭はシヤケ、ハシは「端」「箸」「橋」がありますが端はハジッコ、ひっきりなしはシツキリナシ。しかし東京の人たちはそれらがおかしいとは思っていません。江戸時代、東京の人口は世界一くらい多かつたと言われますが、その中、三分一くらいは参勤交代で江戸に来た地方の武士たちでした。単身赴任の彼らは常に欲求不満でイライラしていますから関西風に「おつとり」「のんびり」「はんなり」などしていられません。知識欲、スピードが重んじられ、それらが明治時代にも受け継がれ、近代日本を作ってきたわけです。

千里山は関西でも関東でもなく、住民は中産階級のインテリゲンチヤが自然に集まった集団であつたと思えます。インテリゲンチヤは洋の東西を問わず近代社

会の形成の原動力になった貴重な人材の集合体を言います。私たちの親の世代は純粹の大阪人は少ない。彼らは刻苦勉励して地位と生活の安定を手に入れ、千里山というハイカラで自由な土地に住むことができた。その彼らの子供世代である私たちは千里山のお嬢様として育ち、誠に幸せであったわけです。でも戦後、千里山にいられなくなつたお嬢様もいました。私の小学校の友人Kさんは立派なお屋敷に住んでおられました。戦後父上の会社が経営不振となり、引越されました。そのあと、私は彼女と梅田でばったり逢いました。彼女は「うちはもうあかんねん。家も人手に渡つたし。一番悲しかったのはピアノと別れたことやねん。ピアノの最後の晩はお姉ちゃんたちと泣きながら、一晩中弾いたんよ」と顔では笑いながら、彼女のその大きく魅力的な黒い瞳に次第に涙がにじんできました。私は黙って彼女の手を握って溢れてくる涙を止めることはできませんでした。彼女はその後幸せな結婚をされ、お子様にも恵まれたのですが、数年前ガンで亡くなりました。私は千里山のお嬢様たちを思い出すたびに、まずあの彼女の瞳を偲んで胸がいっぱいになります。

最近ある雑誌の見出しに「アメリカキャリアウーマンの衰退」というのがあり、読んでみました。その一文の主旨は「現在アメリカではハーバード大学卒業の

キャリアウーマンが、惜し気もなくキャリアを投げ捨て、家庭に入つて、余裕を持つて家族を愛し、自らも静かな幸せを求める傾向がある」と言っている。彼女たちは「ほどほどに恵まれ、静かな知的な生活を求めている」のだそうです。このほどほどに恵まれた環境を自然体で受け入れ、己の程をわかまえ、知的に静かに生きるという生き方を昔から実践しているのが千里山のお嬢様たちの生き方であると思う。その根底にあるのは賢さである。この「賢さ」とは前に述べたインテリゲンチヤとも少し違う。自ら求め無理をして手に入れるのではなく、ほんわかと自然体でおれば、自ら身につくもので、これこそ女性が一番幸せな生き方ではないだろうか。私たち15回生は小学校卒業以来80才になる昨年まで毎年同窓会をしていた。これを友人たちに言うとき皆に羨しがられる。

もう一つ羨ましがられるのがある。それは千里第二小学校のクラスの名である。雪組月組花組。それを聞いた人は先ず笑い出す。それから「羨ましい」と言う。日本美の基本は「雪・月・花」でありこの自然美を味わい、歌に詠み、心を慰めてきたのは日本人である。この美意識は世界遺産になった富士山や和食を創つた基本である。このクラス名は永久に残して頂きたい。ただの宝塚の真似ではない。

宝塚は今年で百年、千二小は85年目です、千二小以外で雪・星・月・花をクラス名にしていた学校をご存じの方あればご一報下さい。編集部

付記

本稿のタイトルを「千里山のお嬢様」と致しましたので私自身をお嬢様だつたと言っているように受取られるかも知れません。実は昭和20年を中心とする戦中戦後の千里山育ちの娘達を何と表現したらいいか悩みました。千里山の「娘たち」「女の子たち」というのもピンときません。たしかにこの時代の千里山の娘たちは日本全国の基準から言えば「お嬢様」でした。千里山という自由で知的な環境で育つた幸せな娘たちという意味を込めて、敢えて「お嬢様」といたしました。

しかし地方出身のの身分の高いお嬢様（江戸時代なら姫君）は学生寮にはおりませんでした。彼女たちは然るべきお屋敷で暮らしておりました。